平城第 347 次調査　現場説明会資料　020831

# 興福寺中金堂院回廊東南の調査

法相宗大本山　　興福寺
奈良文化財研究所　平城宮跡発掘調査部

## はじめに

興福寺では 1997 年に主要伽藍を対象とした復元整備計画をたてました。奈良文化財研究所は興福寺の依頼をうけて、遺構の詳しい状況を把握するために、これまで中門（1998 年度）、回廊東北・中金堂前庭部(1999 年度)、中金堂(2000・2001 年度)の発掘調査をおこなってきました。今回は未調査地の回廊東南部を発掘しています。調査面積は 981 ㎡、7 月 1 日より調査を開始し、現在も継続中です。今回の調査により中金堂院回廊の全容がほぼあきらかになりました。

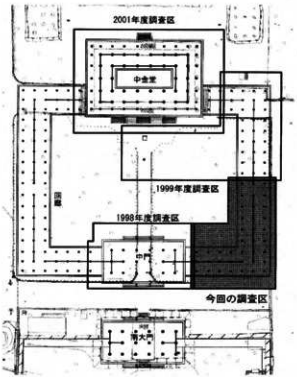



図１．調査区位置図

## 中金堂院の歴史と回廊の構造

興福寺は藤原氏の氏寺として奈良時代はじめに創建されました。最初に中金堂・中門・回廊からなる中金堂院が造営され、さらに周辺に堂塔が建設され、ほぼ奈良時代のおわりまでに主要な建物がそろいました。その後、度重なる火災にもかかわらず、創建当初の規模を維持しながら再建してきましたが、享保 2 年(1717 年)の火災以後は文政 2 年(1819 年)に中金堂のみ仮堂(かりどう)の形で再建されただけで、中門や回廊はついに復興されませんでした（年表を参照）。

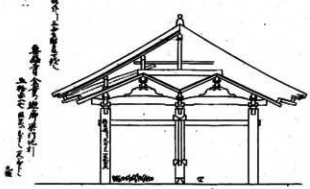


図２．回廊断面図（『興福寺建築諸図』所収）

興福寺の伽藍については平安時代以来いくつかの絵図が伝わっています。とくに江戸時代に描かれた中金堂院の平面図や各建物の実測図がのこっていますので、享保 2 年焼失以前の状況を知ることができます。絵図によれば回廊は連子窓をいれた壁が中央に通り、その両側に吹き放しの廊下がある複廊の構造であったことがわかります。

## 発掘調査の成果

### 回廊基壇

東面回廊は17間で全長約65m（220尺　奈良時代の1尺≒0.2955m）、中門を含む南面回廊の全長は約84m（284尺）あります。興福寺の歴史をつづった『興福寺流記』が引く「宝字記」によれば、東面回廊の全長は222尺とあり、今回の計測値と一致しません。今回の調査で検出した部分は、東面回廊南半の桁行8間分、南面回廊東半の桁行6間分、そのうち東南隅の2間は隅部分です。回廊は既に調査した中門と回廊東北部の成果から推定した位置で検出しました。梁行は東面、南面回廊とも2間で、回廊基壇の幅は36尺あまり（10.74m）、基壇の出は6尺あまり（1.82m）であったことがわかります。基壇は地山の上にさらに土を版築で積み上げてつくられています。

礎石が残っていたのは東面回廊中央柱筋の北端と東側柱筋南端の2基のみで、そのほかの柱の位置は礎石の抜取穴によって確認できました。抜取穴の断面をみると、最初に礎石を据えるための方形の穴（据付穴）を掘り、底に土をいれて版築でつき固めたあと、礎石のすわりがよくなるように石（根石）をおきます。礎石を据えた後、基壇の上に土を一層積み重ねていますが、本調査区の南ではその層がすでに削平されているため、据付穴の輪郭もみえています。中央の柱筋上には凝灰岩の地覆石が2列にならんだ状態で発見されました。これは中央の壁をうける横材を乗せた部材です。

基壇そのものの造営年代や修復の時期などは現在調査中ですが、礎石抜取穴からは江戸時代後半以降の瓦や陶磁器片が出土しています。また一部の抜取穴からはガラス瓶の破片が出土していることから、礎石が抜き取られた時期は江戸時代後半から一部は明治時代以降にまで下る可能性があります。

### 基壇外装と雨落溝

東面回廊西側と南面回廊北側では基壇の側面を飾る外装と雨落溝を検出しました。基壇外装は凝灰岩の切石でつくった地覆石とその上にのせる凝灰岩製羽目石の下端部が一部残っています。羽目石は下端に切り欠きをつくり地覆石にうまく嵌るように加工されています。こうした状況から全体は切石でつくった壇正積基壇であったと考えます。

雨落溝は地覆石より一段低い位置に川原石を2列に並べて幅約40cmの底石とします。中庭側には溝の側石があり、さらに川原石を平らにしきつめた幅約90cmの石敷きがありました。東面回廊西側の溝では雨水は南にながれ、南面回廊の基壇を南北に貫く暗渠を通って回廊外へ排出される構造です。回廊東側と南側にあったはずの基壇外装と石組みの雨落溝は後世に壊されたために残っていませんでした。

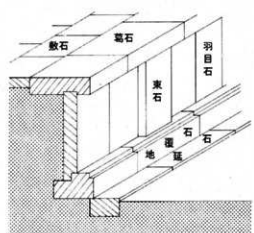



図3．壇正積基壇各部の名称

## 階段と門

石組みの雨落溝は東面回廊の最も北の柱間にあたるところだけ西側に張り出していました。さらに溝の回廊側には東西方向に据えた長方形の切石を検出しました。この切石は階段北辺の耳石地覆石で、溝の張り出しは階段の出に対応することがわかります。基壇外装の地覆石上面と礎石上面の高さから当時の基壇の高さを算出し、これにもとづいて階段の構造を復元してみると階段石を 1 段だけそなえた形を想定することができます。階段の存在によってこの位置の柱間が門であることが確認できました。

つづいて階段の南辺と考えられる位置に階段耳石地覆石の抜取穴を検出しました。階段南北の耳石地覆石間の距離をはかると奈良時代の 14 尺（約 4.1m）となります。地覆石間の中心点と門北側の礎石の心との距離を 2 倍にすると、門の柱間も 14 尺であったことがわかります。

『興福寺流記』や江戸時代にかかれた回廊の平面図をみると、回廊にはいくつかの門があったことがわかります。とくに東面回廊の中央近くに描かれた門の位置は階段を検出した柱間の位置とピッタリ一致しました。回廊北東の調査終了後、課題として残されていた門の位置とその柱間寸法を確認することができました。

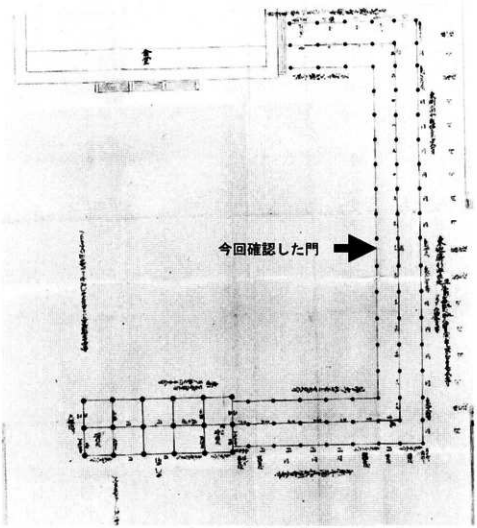



図 4．回廊平面図（『興福寺建築諸図』所収）

## 回廊の柱間寸法と中金堂院の設計

東面回廊の東北隅の礎石と南東隅の礎石間の距離を実測したところ 65.13mありました。これを奈良時代の尺に換算すると 220 尺となります。東面回廊の柱間は全部で 17 間ですから、中央の柱間は北からも南からも 9 間目のところにあたるわけですが、今回確認した門はそれより 1 間南で、門は回廊の中央ではありません。門の中心軸から、最北端の柱と最南端の柱との距離をそれぞれ実測してみると、門以南は 100 尺、門以北は 120 尺というキリのいい数字になります。そして門を境に以北と以南の桁行柱間寸法がことなっているのです。南北隅の 2 間分は回廊の梁行に合わせて 12 尺ですが、門以南の桁行柱間は 13.8 尺、門以北は約 12.7 尺（$12\frac{5}{7}$）となります。

ここで回廊の設計の順序を考えてみますと、まず東面回廊の全長を 220 尺と設定し、門の位置を決めて、門を基準にその北と南を 120 尺と 100 尺に分けます。120 尺と 100 尺からそれぞれ隅部 2 間分の 24 尺を引き、さらに門の柱間 14 尺の半分、7 尺を引いた値、北 89 尺、南 69 尺をそれぞれに必要な間数で割り振る。門の南北で桁行寸法が異なる理由は門の位置が南にずれていることにあることがわかりました。つまり門の位置は回廊を設計するための基準となっているのです。さらに門の中心軸を東西に伸ばすと東金堂と西金堂の中心に一致します。東西の金堂は中金堂院よりおくれて造営されていますから、この両金堂は門からのびる軸線を基準に設計されたことがわかります。したがって門を基準とする中金堂院の東西軸線は周辺の伽藍を設計する際にも基準となっていたと考えられます。

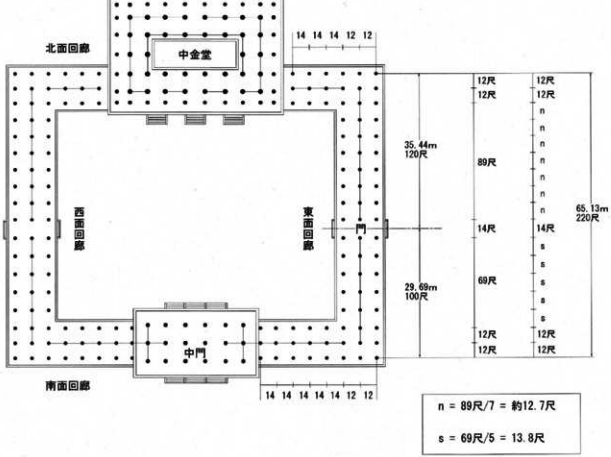



図５．東面回廊　柱間寸法図

**近世以後の遺構**

回廊に囲まれた中庭部分では新しい時期とおもわれる建物を 2 棟検出しました。西よりの建物 1 は現在調査中で、時期や構造などは不明です。ただし瓦を小口立てにしてつくった雨落や丸瓦を一直線にならべた仕切りのようなものがともなっています。東よりの建物 2 はすでに回廊東北の調査で確認されていたもので、今回はその南部分を検出しました。時期は明治以降と考えられます。

中庭部分はおそらく享保 2 年の火災のあと、しばらくしてからのことですが、石組み雨落溝とともにほぼ回廊基壇の高さまで埋め立てられます。元の石組み雨落溝の位置に、この埋め立てた土を掘り込んでつくられた新たな溝を検出しました。この溝の側辺には溝の護岸と考えられる石積みの一部がのこっていました。埋め立て後の雨水処理のための溝であると考えています。

**出土遺物**

瓦類：奈良時代創建時から江戸時代まで、各時期の瓦が出土しています。すべて割れて破片となっていますが、文様のある軒瓦によってその時代がわかります。多くは中庭部分を埋め立てたときの土や埋め立て前の地面に掘り込んだ瓦廃棄穴などから出土しました。類例のすくない安土桃山時代の桐文道具瓦が出土しており、1999 年度に中金堂前庭部から出土した金箔瓦との関係が注目されます。

土器類：中庭の瓦廃棄坑穴から 11 世紀後半の土師器皿が出土しており、一部は灯明皿として使用しています。そのほか江戸時代の土師器皿や陶磁器が出ています。

金属器類：今回は多数の銭が出土しています。江戸を通じて流通していた寛永通宝がもっともおおく、そのほか明治以降の一銭玉・二銭玉などもありました。

**おわりに**

本調査のもっとも重要な課題は回廊の構造を明らかにすることでした。発掘の結果、これまでの発掘調査成果と矛盾することのない構造の回廊施設を確認することができました。5 年度にわたる発掘調査によって、中金堂院の主要建物と回廊の東半分の状況が明らかになりました。中金堂院は左右対称につくられているはずなので、基本的には院の全貌が明らかになったといえるでしょう。ただし東面回廊の南北長については『興福寺流記』に記載された規模とは異なっていることから、今後、検討を進める必要があります。

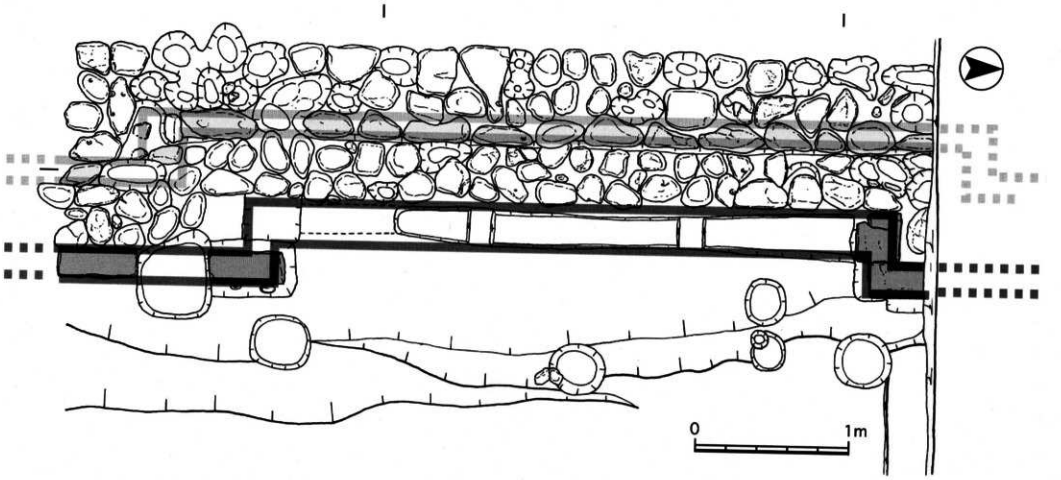
もう一つの重要な成果は、東面回廊に開く門の位置と規模を確定したことによって、中金堂院の設計構想の一端を知ることができたことです。門の軸線は興福寺の伽藍配置における東西方向の重要な基準となっていたことを明らかにしました。

興福寺の造営の経緯を解明するとともに、奈良時代の寺院史を研究する上でもひとつの基本資料を提供するものです。

| 和 暦 | （西暦） | 事 | 項 |
|---|---|---|---|
| 和銅３年 | （710） | 3月 | 平城京遷都（続紀）　藤原不比等厩坂寺を平城京左京三条七坊に移し、興福寺と称す（興福寺流記） |
| 和銅７年 | （714） | 3月 | 興福寺金堂供養（初例抄・帝王編年記） |
| 養老４年 | （720） | 8月 | 藤原不比等没（続紀） |
| | | 10月 | 造興福寺仏殿司を置く（続紀） |
| 養老５年 | （721） | 8月 | 北円堂建立（興福寺流記）　金堂に弥勒浄土を造る（興福寺流記） |
| 神亀３年 | （726） | 7月 | 東金堂建立（興福寺流記・扶桑略記） |
| 天平２年 | （730） | | 五重塔建立（興福寺流記・扶桑略記） |
| 天平６年 | （734） | 正月 | 西金堂建立（興福寺流記・扶桑略記） |
| 弘仁４年 | （813） | | 南円堂建立（興福寺流記） |
| 元慶２年 | （878） | 4月 | 鐘楼・僧房など焼失（日本三代実録・扶桑略記） |
| 永承元年 | （1046） | **2月** | **北円堂・倉を除く諸堂焼失**（扶桑略記・百錬抄・僧綱補任） |
| 永承３年 | （1048） | 3月 | 金堂・講堂・南円堂供養（造興福寺記・百錬抄・中右記） |
| 康平３年 | （1060） | **5月** | **金堂・講堂・西金堂・中門・回廊・南大門・三面僧房など焼失**（扶桑略記・百錬抄・参会定一記・康平記） |
| 治暦３年 | （1067） | 2月 | 金堂・講堂など供養（扶桑略記・百錬抄） |
| 嘉保３年 | （1096） | **9月** | **金堂・僧房・講堂・回廊・中門・南大門・鐘楼・経蔵など焼失**（中右記・百錬抄） |
| 康和５年 | （1103） | 7月 | 金堂・講堂など供養（中右記・百錬抄・本朝世記） |
| 治承４年 | （1180） | **2月** | **平重衡の兵火により全焼す**（玉葉・吾妻鏡） |
| 建久５年 | （1194） | 9月 | 金堂供養（玉葉・百錬抄・愚管抄） |
| 建治３年 | （1277） | **7月** | **金堂・講堂・三面僧房・中門・回廊・南大門など焼失**（中臣祐賢記） |
| 正安２年 | （1300） | 2月 | 金堂など供養（嘉元記・帝王編年記） |
| 嘉暦２年 | （1327） | **3月** | **衆徒の争乱により金堂・講堂・西金堂・南円堂・中門・回廊・南大門など焼失**（嘉元記） |
| 応永６年 | （1399） | 3月 | 金堂供養（東院毎日雑々記） |
| 享保２年 | （1717） | **正月** | **講堂・金堂・西金堂・回廊・中門・南大門・南円堂焼失**（享保弐丁酉日次記） |
| 文政２年 | （1819） | 9月 | 金堂建立、篤志家の寄進による仮堂建築（興福寺再建記） |
| 慶応４年 | （1868） | 3月 | 神仏分離令発令（復古記） |
| 明治14年 | （1881） | 2月 | 再興を許可される（興福寺資料） |
| 昭和49年 | （1974） | 1月 | 仮金堂建設（工事報告書） |

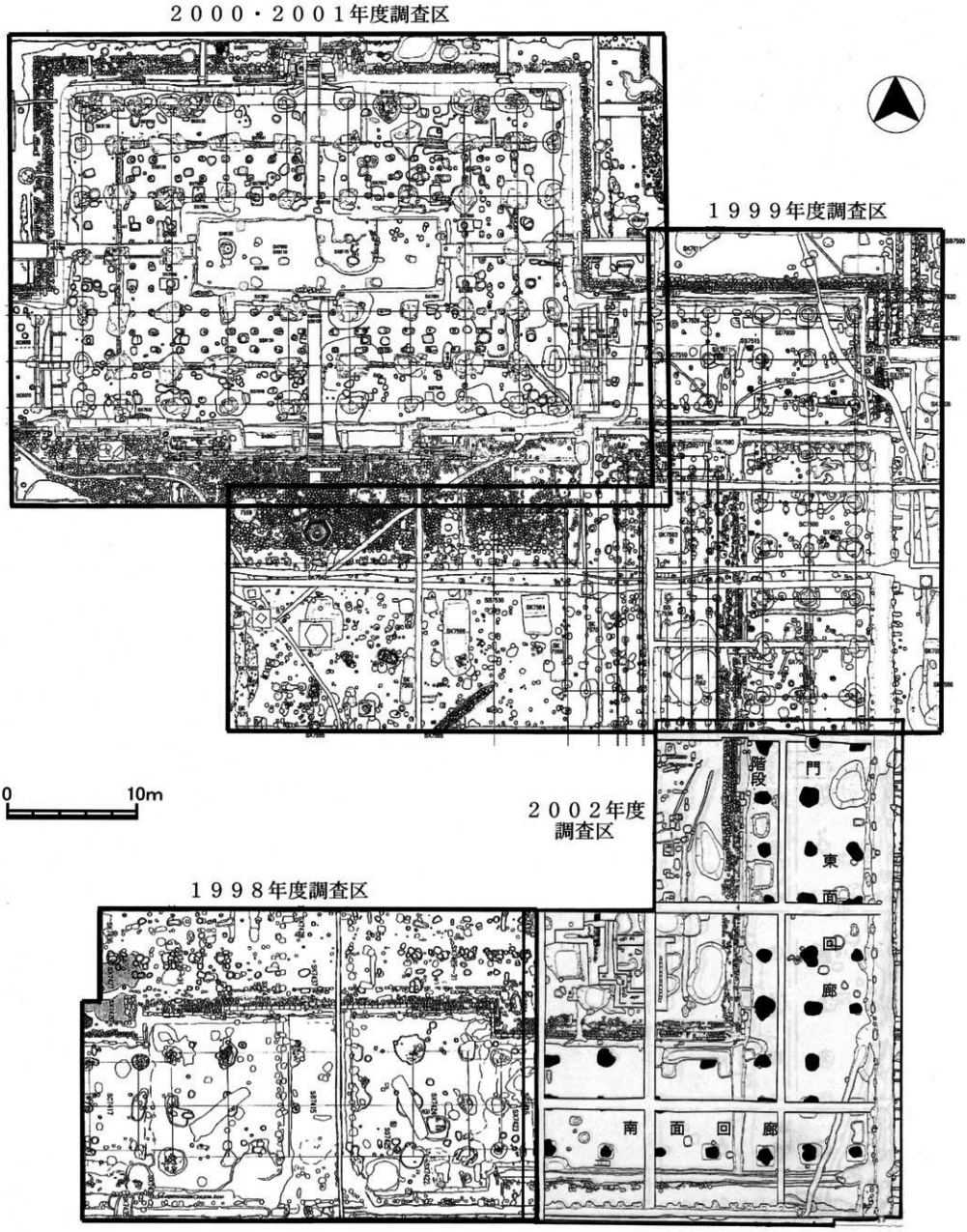
**興福寺略年表**

興福寺回廊




東面回廊　階段平面図

平城第347次　興福寺回廊東南 遺構平面図




興福寺中金堂院　既発掘区遺構全図

（奈良文化財研究所　平城宮跡発掘調査部査部）